2010 年 4 月 23 日 佐土原キリスト教会 礼拝説教
聖書箇所：マルコ福音書 15 章 42～47 節
説教題：葬りは語る

「カナダの伝道の様子も聞きたい」というお話を頂きました。少しずつお話しする機会があればと思いますが…。これは先週もお話ししたのですが、私達がカナダで開拓伝道を始めようと決めた時、具体的な見通しは何もありませんでした。そのような中、神様が送って下さった兄弟姉妹方に支えて頂き、家庭集会から始めて一歩一歩前に進んで行きました。しかし依然として、「これからどうなるのか」、はっきりした道筋は見えなかったのです。しかし実はその時は、カナダの教会会議が「これからは協会会議も開拓伝道に力を入れて行こう」と決めた時だったようです。教会会議の「伝道と教会成長委員会」の委員長が私達の前に現れて、私達を励まし、様々に手を貸してくれ、私達の進むべき道筋を導いてくれました。そして 2 年後、家庭集会から始まった集会は、教会会議の 35 番目の教会として迎えられ、公教会として活動が出来るようになりました。彼のことを思うと、神様が私達のために送って下さった神の器だったな、と思います。

神様は、私達に様々な慰めや励ましを与えて下さいますが、しばしば人を通してそれらの御業を為さるのではないでしょうか。そして今日の箇所でも、神様は、イエス様の十字架で悲しみにくれる女性達を励ます器を送っておられます。アリマタヤのヨセフという人です。

先々週、先週とイエス様の甦りの記事を学びましたが、実はその前に書かれてある「イエス様の葬り」の記事を取り上げることが出来ないままでした。そこで、時間的には前後するのですが、今日は「イエス様の葬り」の記事を学びたいと思います。「内容」と「メッセージ」とお話しします。

1. 内容：主イエスを埋葬するアリマタヤのヨセフ

十字架のイエス様が息を引き取られたのは、金曜日の午後 3 時でした。ユダヤの 1 日は日没―(午後 6 時)―から始まります。「モーセの律法」によれば、処刑された人の体が木につるされていたならば、その体は、その日の内に取り除かれ、埋められなければなりませんでした。ローマ占領下では、その律法は十字架刑に適応されました。しかし多くの場合、犯罪人は共同墓地とも言えないような所に投げ入れられるのが関の山でした。それ以下の酷い仕打ちを受けることもありました。

しかしイエス様のお体を、そのような惨めな取り扱いから救う人物が現れます。それが申し上げたアリマタヤのヨセフです。47 節に、埋葬の様子を見ていた婦人達のことが書いてあります。本当は彼女達こそがイエス様の埋葬をしたかったことでしょうが、それは出来ませんでした。議員であったアリマタヤのヨセフのように、総督ピラトに直談判して、「死体の引渡しを願い出て、聞き届けられる」等という力は、彼女達にはありませんでした。何よりガリラヤからやって来た彼女達は、ここに墓を持っていませんでした。アリマタヤのヨセフは、エルサレムの近くに墓を持っていたのです。彼は、アリマタヤという所の出身でした。アリマタヤは、エルサレムから西に 40～50km の所にあった町のようです。しかし、彼は議員になってからでしょうか、その前でしょうか、エルサレムに移り住んでいたのです。そして高齢になった彼は、自分のために墓を造っていたのでしょう。「マタイ福音書」には「…岩に掘った自分の新しい墓の中に納め…」(マタイ 27:60)とあります。その新しい墓に、引き取ったイエスのお体を納めたのです。通常、死体には、香料と香油で埋葬の処置が施されますが、安息日の始まる日没が迫っていたので、それは後に延期されたようです。それでも「ヨハネ福音書」によれば、同じく議員であった―(隠れ弟子の)―ニコデモが、香料を持って駆けつけています。その香料で応急処置をして、イエス様のお体を墓に納めたのでしょう。

しかしヨセフは、なぜ、このようなことをしたのでしょうか。「ヨハネ福音書」には、「…イエスの弟子で…あった…」(ヨハネ 19:38)とあります。彼は、どのような形だったのか、イエス様の弟子だったのです。イエス様の言葉を、自分を生かす言葉、自分を愛して下さる神様の言葉として聞いていたのではないでしょうか。そのようにしてイエス様を慕っていたのです。43 節に「ヨセフは、思い

切ってピラトのところに行き、イエスのからだの下げ渡しを願った」(43)とあります。「新共同訳」は、「勇気を出してピラトのところへ行き…」(43)と訳しています。そのように彼の行為は、勇気の要る行為でした。十字架に架けられた者の遺体は、ローマ政府のものでした。その遺体を下げ渡してもらうことが出来るのは、原則として身内だけだった、と言われます。ヨセフのような身分のある人でも、ピラトからイエスの遺体を下げ渡してもらうためには、自分とイエスとの関係を「私もイエスの弟子でした」と説明しなければならなかったと思います。イエスは、ユダヤ社会全体から寄って集って十字架に架けられた人です。だからその人との関係を告白し、遺体を引き受け、自分の墓地に葬ることは、きっと彼の社会的な名誉や、地位を傷つけることだったと思うのです。しかし彼は、犠牲を覚悟して、勇気を振り絞ってこのことを行ったのです。

しかし一方で、先の「ヨハネ福音書」には、「…イエスの弟子ではあったがユダヤ人を恐れてそのことを隠していたアリマタヤのヨセフが…」(ヨハネ 19:38)とあるのです。議員という社会的な立場が邪魔したのかも知れません。表立って弟子としての活動は出来なかったのでしょう。「ルカ福音書」には「…同僚の決議や行動には同意しなかった…」(ルカ 23:51)とあります。「彼は、議会で行われた『イエスの死刑判決』に賛成はしなかった」と言うのです。しかしだからと言って、議会において反対の声を上げたかと言うと、そうではなかっただろうと思います。議会は「全会一致」でイエスの死刑を決めているようです。彼は、心の中では反対を呟きながら、しかし何も発言しなかったのかも知れません。あるいは判決に加わることを避けて、議会を欠席したかも知れない。いずれにしても「命をかけてイエス様を守った」というようなことをした訳ではないのです。

ではなぜ、この時、彼はこのようなことが出来たのでしょうか。「マルコ福音書」は、「みずからも神の国を待ち望んでいた人であった」(43)と説明しています。彼は当時の社会に在って、自分の無力さを思うこともあったでしょう。社会の不正に耐え難い思いをしながら、しかし、何も出来ない自分に歯がゆい思いをしていたかも知れない。しかし、だからこそ「神の国」を待ち望んでいたのです。それはつまり、やがて神が全てを支配なさる時が来ることを信じ、待望しつつ、「今、自分の為し得る限りにおいての正しさ、優しさ、神への愛」に生きようとしていたということではないかと思います。そのヨセフは、恐らくこの時、既に神様の支配の中に入り、神様の御腕に支えられていたのです。支えられていたからこそ、この場面で勇気を出すことが出来たのです。そしてここにいる女性達、特に我が子の悲惨を見つめ続けて来た母マリヤの悲しみを受け止め、彼女達を慰めるような業を為すことが出来たのです。ヨセフの登場によって、彼の為した業によって、女性達は、どれほど慰められたでしょうか。

2. メッセージ：主イエスの埋葬が語る希望

この個所から 2 つのことを学ぶことが出来ると思います。

1）葬られる時にも主にお会い出来る

この箇所からはヨセフの姿から受けるメッセージが大きいのですが、その前にこの箇所が伝えたい一番のメッセージ、実はそれは「イエスが葬られた」ということです。この箇所は「イエスの葬り」を報告するのです。

「イエスが葬られた」ということは何を意味するかというと、「イエスが確かに死んだ」ということです。色々な形で教会が攻撃される時、繰り返し持ち出されたのが「イエスの復活」を否定することでした。その中には、「イエスは、実際に死んだのではなくて、気絶していただけだったのではないか」とか、「半死にだったのではないか」というような意見があったのです。ある人は「気絶していたイエスが墓の中で意識を取り戻したのだ」と言いました。しかし「福音書」は、「イエスは葬られた、完全に死んだのだ」ということを、この箇所を通して語るのです。

それは、私達にとって何を意味するのか。それは「イエス様が私達と同じように葬られて下さった」ということを意味するのです。イエス様は、私達と同じ「人」となって下さいました。しかしイエス

のご生涯は、あまりにも崇高で、私達の生涯とは基本的に違うような気がします。いや、違うでしょう。「イエス様に従い、ついて行く」と言っても、「距離があり過ぎて、とても出来ない」という印象を持つことが多いのではないでしょうか。イエス様と私達と重なる部分が見えないように思うのです。

しかし「イエスが死んで葬られた」、これだけは私達の誰にでも無条件に重なることです。CS ルイスが言っています—(少し短く言い換えてご紹介します)。「神であるイエスは、本来死ぬ必要のない方である。あえて言えば、死ぬことが出来ない方であった。でも人間になれば死ぬことが出来る。イエスは、私達が死に際してもイエスの御跡を見ることが出来るように、イエスと会うことが出来るように、死んで下さった」。イエスは本当に死んで、葬られて下さったのです。私達も皆、やがて死ぬ時が来ます。私達は、天の御国の復活に希望を置いていますが、その前に必ず葬られるのです。死の時に「一番恐ろしいのは孤独だ」と聞いたことがあります。しかし、イエス様が葬られて下さったから、私達はそこでも恐れる必要がない。そこででもイエス様とお会いすることが出来るに違いないのです。イエス様と一緒に葬りを通ることが出来るのです。イエス様がきっと手を引いて下さることでしょう。「イエスも死んで葬られて下さった」、このことの中に、私達は慰めを見出すことが出来るのです。葬りの中でもイエス様が待っていて下さるのです。何と感謝なことでしょうか。

2）神の国を待ち望む生き方に希望がある

2 番目のメッセージはヨセフの姿から教えられることです。

ヨセフは、為し得る限りの勇気を振り絞ってイエス様を葬りました。彼の話は特別かも知れませんが、しかしそれは、神様が彼を支えておられ、彼に勇気を与えて下さったからでした。しかしそれは、彼の側から言えば「神の国を待ち望んで生きていた」ということになると申し上げました。43 節の「みずからも神の国を待ち望んでいた人であった」(43)を、「新共同訳」は「この人も神の国を待ち望んでいたのである」(43)と訳します。「この人も」ということは、「マルコ福音書」を書いたマルコも、マルコの背後にあった教会も、同じ思いであったということです。つまり、「それが信仰者の生き方だ」と言おうとしているのではないでしょうか。

では、「神の国を待ち望む」とはどういうことなのでしょうか。それは、世の中は、神様の具体的な働きが見えないように感じることがあります。身の回りの問題は、なかなか解決しません。無力感に襲われます。しかしそれらは、決してそのまま終わるものではない、やがて全ての問題に本当の解決が与えられる時が来るのです。「神が大いなる御力をもって世を支配なさる国」が来るのです。「神の国を待ち望む」とは、先にも申し上げたように、それを待望しつつ、ヨセフのように、自分の出来る範囲で、精一杯の正しさに、優しさに、愛に、そして何より神様への信仰に生きることではないでしょうか。その時、弱い私達も、神の御手の中で、神様の力に生きる恵みに与ることが出来るのではないでしょうか。

話が飛躍しますが、先日、何気なく「百万人の福音」をめくっていたら 1 つの言葉に目が留まりました。「キベヘイトロ、コロび申さず候」、「ペトロ岐部は決して信仰を捨てなかった」という言葉です。ペトロ岐部のことは以前も少しお話ししましたが、大分の国東半島の出身のキリシタンです。日本が徐々にキリスト教迫害の波にもまれて行く中、彼は日本を追放された宣教師と共にマカオへ渡り、インドのゴアに行き、さらにパレスチナに行き、聖地エルサレムを見て、そしてローマまで行き、ローマで司祭に叙階されました。司祭に叙階されると、キリスト教迫害の嵐が吹き荒れる日本に、日本のキリシタン達のために帰ることを希望し、苦労して迫害下の日本に帰って来ます。そして長崎から東北まで、あちこちに潜伏しながらキリシタン達を励まして歩きます。ついに仙台で捕らえられ、江戸に送られ、江戸で穴吊るしの刑に処せられます。穴吊るしに処せられている間も、同じように穴吊るしで苦しんでいるキリシタン達を一生懸命励ましました。あまりにも励ますものだから、彼は穴から引きずり出され、処刑されるのです。彼の取り調べに当たった井上筑後守が記録した言葉が先にご紹介した「キベヘイトロ、コロび申さず候—(『ペトロ岐部は決して信仰を捨てなかった』)」という

言葉でした。ペトロ岐部への畏敬の念さえ感じさせる言葉です。

私は前から不思議でした。なぜ彼は(彼ら)は殉教することが出来たのか。しかし、このメッセージを準備して少し分かったような気がします。「神の国の到来を待ち望み」、置かれた場所で、精一杯の正しさに、愛と優しさに、神様に対する信仰に生きようとした彼は、既に神の御手の中にあり、神が彼を支えられ、励まされていたのではないかと思うのです。それで彼は、あのような生き方が出来たのではないか、そんなことを思ったのです。

話が大きくなりましたが、出来る範囲で良い、「神の国の到来を待ち望み」、精一杯の正しさ、優しさ、神への愛に生きようとする者は、神が御国の中に引き入れ、力に与らせて下さるのではないでしょうか。

こんな話もあります。あるところに1人の神を信じる男の子がいました。その子の妹があるとき重い病気にかかりました。女の子が助ける唯一の道は、同じ病気にかかった誰かから、つまりその病気に対する免疫を持つ人から血液をもうことでした。男の子は、2年前に同じ病気にかかって、癒されていました。2人の血液型は特殊なものだったため、理想的な血液提供者は、この男の子でした。医者が尋ねました。「妹のメアリーに君の血をくれないか」。男の子はためらいました。顔は青ざめ、下唇が震えています。でも次の瞬間、彼は笑顔で言いました。「いいよ、妹のためだもん」。間もなくして、2人の子供はストレッチャーに乗せられ、治療室に運びこまれました。2人とも黙ったままでしたが、目が合った時、男の子はニコッとしました。でも、彼の腕に看護婦が注射針を差し込んだ瞬間、少年の顔から笑顔が消えました。男の子は、細い管の中を流れて行く自分の血液をじっと見つめていました。やがて震える声で尋ねました。「先生、ぼくいつ死ぬの」。この男の子は、自分の血を妹にやることは、自分が死ぬことだと考えたのです。それにも拘わらず、血を上げることを決断したのです。

私は、この話の背後にも、神様の励まし、支えを感じます。神様は人を用い、その人を御手の中に引き入れ、励まし、勇気を与え、力を与え、神の業に用いられる、誰かを慰める器とされるのではないでしょうか。

私達も「神の国を待ち望む」生き方がしたいと願います。つまり、難しいですが、置かれたところで、精一杯の正しさに、愛に、優しさに、神への愛と信仰に、生きる、そんな歩みが出来れば、と願います。その歩みの中で、信仰において弱い私達も、神が御業のために—(誰かを慰め励ます器として、神様の栄光を表す器として)—用いて下さるのではないでしょうか。そのように生きる者を、神は祝福して下さるのではないでしょうか。

アリマタヤのヨセフは、主の葬りをしました。彼の墓は、イエス様の復活の舞台となり、そしてその同じ墓にアリマタヤのヨセフは、やがて身を横たえて眠りについたのです。彼こそが、「甦り」に対する、誰よりも強い希望と確信を持って眠りにつくことが出来た人であったと思います。